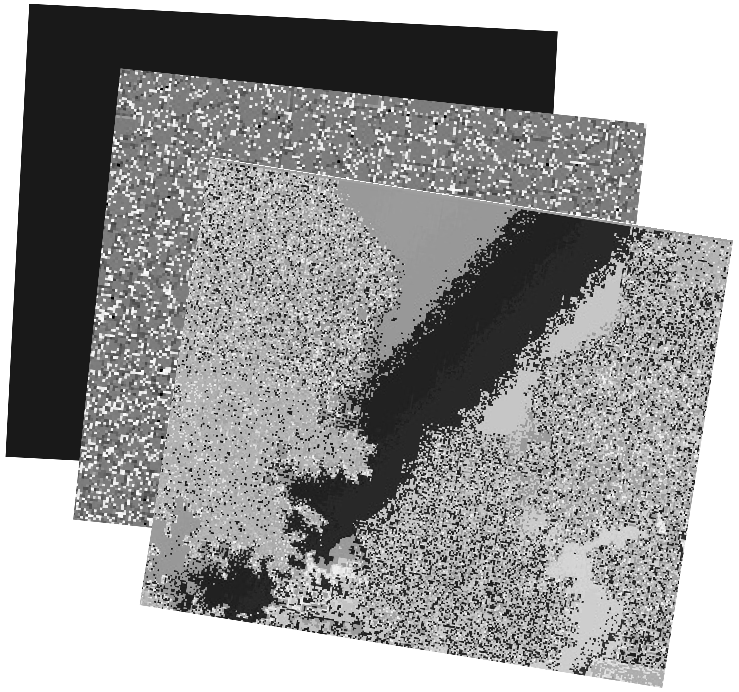
月 刊

Mélange

Vol.157



2020.11.29

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol.157.2020.11.29

「月刊めらんじゅ」編集部

カフカ教団 ⑪=最終回　高木敏克

誰にも聞かれないように彼女の耳元で「好きだよ」と言い、彼女の匂いを吸い込もうとしたら、まったく匂いがない。やはり、もう生きていないみたいだ。彼女は生きた友達とここで飲んでいる。女同士幸せそうな会話が聞こえてくるが、女同士の友情には裏があるという。

「かわいそうに、あの人は自殺したことをすっかり忘れているのよ。一度目に失敗した時も自殺の記憶はきれいに消えていて、家族に教えてもらって、やっと未遂のいきさつを知ったのに、最後に成功した時は誰もいきさつを教えてくれなかったのよね」

僕はこの聞えよがしの二人の女性客のひそひそ話で、彼女の死を確信した。

しかし、相変わらず性格の強いルナは二人連れに言い返していた。

「実は、わたしは眠れなくて、それも永遠に眠れなくて、死ぬこともなく生きることもなく、永遠に水路の中をさまよっているの。それくらい、わかっているでしょ。でもね、もしわたしが死んでいるとしても、もうわたしは悲しくないの、もう死んでいるから。ただ、わたしが現れるところはきわめて狭く限定されていて、この街では地底の海と地底の運河が同じ高さのところだけよ」

「つまり、この地底の運河が海に繋がっている河口ということなのですね」

「そうなの。わたしは特別な船に乗っているわけではなくて、普通に小さな船なの。屋根が半分かけていて、夏も冬もその船で眠ることができるのよ」

彼女と外に出ると二人とも背が高いのでかなり目立った。まるで二人の男が歩いているように彼女も気を使っていたが、彼女のボディラインはかなりくびれていたので、結局目立つしかなかった。二人は何も言わずに地上の運河沿いに西に向かった。懐かしいレンガの壁に挟まれて二人は久しぶりに腕を組んだ。

やがて、倉庫街が見えてくる。倉庫会社の事務所もレンガ造りが長持ちする。運河は西洋風な景色をはかなく映していた。人々が生きている限りブクブクと日々の泡が立ち、水面で小さな花が裂けると、涙ほどの水滴が空に向かって跳ねるのが見えた。水泡まで生きようとしているのに、彼女が生きようとしないのは死ぬほど悲しかった。

「さあ、もうすぐ、君の好きな喫茶店カフカにつくよ」

（完）

「月刊めらんじゅ」157号　目次

詩・俳句

の平面図……………………高谷和幸　6
心なき　詠（俳句）……………………岩脇リーベル豊美　6
モモンガ……………………黒田ナオ　7
スズカケの樹の下で……………………にしもとめぐみ　7
セエルスマンの孤独……………………前田雅正　10
ロードス島の犬……………………高木敏克　12
石の転がり方と拡散の日々……………………大西隆志　13
裸足／雨の日……………………中嶋康雄　14
絆創膏／ことばの積み木……………………野口裕　15
白化するすべて……………………大橋愛由等　17
川向うに／逢う坂／梨を割る……………………木澤豊　18

連載小説

11回目（最終回）／「カフカ教団」……………………高木敏克　3

読書会の報告

アルチュール・ランボォを読んで……………………にしもとめぐみ　9

連載エッセイ

「ロンドン滞在及びその後」……………………モス堀渕敬子　4
益田っこ通信51号／52号……………………元正章　5
〈本のひと皿〉「アップルパイの、遠いまぼろし」……………………安城位久緒　16
神戸詞あしび144「証空の浄土思想が一遍を生み出した」……………………大橋愛由等　20

編集部だより★77／新型コロナウィルスの第3波がこの国に押し寄せている。またもや都市封鎖もどきや飲食店の営業時間短縮要請などが行政側から提示されている。12月は、例年なら忘年会など、飲食業界が一年でいちばん賑わう時季である。その時に、営業自粛しろとは零細企業が多い飲食店にとっては死活問題となる。来年（2021年）になっても状況はすぐ好転するとは思えない。この調子でいくと、第4波、第5波といったピークもありそうだ。今回ほど予測のつかない事態は珍しいのではないか。こういう時は、預言者そのものか、詩人という言葉を使った情況を先読みする予知能力者の出番なのかもしれない。／2020年は徹頭徹尾、コロナに翻弄された。しかしこの〈時局〉は、表現する者たちにとって大きな刺激を与えることとなった。さきほど印刷があがった詩誌「Oct.vol.7」（発行人・高谷和幸）では、兵庫県が出した自粛期間中にFACEBOOKで展開した「日誌」が掲載されている。これは私・大橋が提案して、詩友・大西隆志氏のサイトで展開したもので、あらかじめ54文字詩（一行9字×6行）の詩文と写真を送稿するという取り決めで、誰でも自由に投稿できるようにした。この文学的試みは多くの参加者を得たことを報告しておこう。また「日誌」を終えた座談会を開催して、その意義や可能性も語り合った内容も「Oct.」誌に掲載している。／今年最後の「Mélange」例会の第一部読書会では、詩人・木澤豊さんの好評の宮沢賢治語りをしていただく。テーマは「水先月の四日」。謎めいた賢治らしい作品である。さて、来年は1月に恒例の奄美ふゆ紀行に旅立つ。コロナ騒動の最中の奄美に受けいられるだろうか。（大橋愛由等）

〈ロンドン滞在及びその後〉

—モス堀渕敬子

今から37年前、27歳から28歳にかけて約1年間、私はロンドンに住んでいた。

語学学校に行ったり、違法ながらもアルバイトしたり恋愛に悩んだりして海外での独身生活を楽しんでいた。

結局、交際していた彼とは別れたし、バイトで腰を痛めたりして働けなくなったが、まだエイズだとかテロだとか起きる前のごく平和な時だった。

しかし、昨年思いがけないことがわかった。神戸出身の有本恵子さんという方がロンドンにいる時拉致されたのが、1983年7月だそうだ。私がロンドンで生活を始めたのが、同じ年の10月だった。3カ月違いだ。

さらに驚くことがあった。拉致に関わった人物だ。

その女性はなんと西宮の同じ高校の同窓生だった。彼女は、よど号ハイジャック犯のひとりと結婚して(今は元妻)有本恵子さんの拉致に関わったと証言し、『謝罪します』という本を書いている。

彼女とは中学も違うし、高校でも同じクラスになったことがないので面識はない。でも遠い異国で同郷の、しかも同窓生に出会ったりしたら親近感もわくだろう。もし私が彼女に出会っていたら、ついていったかもしれない。

彼女が自分の関与を証言し出した2002年頃、私はまだアメリカにいたので彼女のことは全く知らなかったが、NHKの国際ニュースで、拉致された方が数名日本に帰国されたのは知っていた。有本恵子さんのことも少しは聞いていたと思う。でもやはり、他人事としてしか聞けなかった。

ちなみに1983年頃はブリティッシュロック全盛で、それを目当ての日本人の女の子が大勢ロンドンにはいた。

拉致に関わったという八尾恵さんの本を一度読んでみようと思う。

◆益田っこ通信

元(はじめ)正章

▼51号／「われは生きている、ゆえにわれ有り」

〈2020.11〉

知友から薦められて、『自己の探求』(中村元著　春秋社)と、ふとした機縁から、『大いなる物語の始まり』(芳賀力著　教文社)を読むこととなった。熟読することで考えさせられた〈われ考える、ゆえにわれ在り〉というよりも、来し方の読書を顧みて、自分という人間を今一度整理しなければいけないきっかけを与えてくれた。

インド思想の「アートマン」と、古代ギリシア語の「プシュケー」とが対応しているとは、まさに青天の霹靂であった。原義は、「息」を意味し、文脈によれば、「風」「霊魂」「命」「「自己(自分自身)」とも訳し得る。「人生の最も根本的なところにおいては、自己が真に自己自身になるという仕方において、人生は宗教そのものである」というのも肯うことができる。

その伝に従えば、「愛は神から出る。愛とは自己でないものを自己のようにして受け入れることである」というキリスト教の教えもまた肯うことができよう。と同時に、哲学や宗教を云々する以前に、「サンライズ　サンセット」なのだ。「日は昇り、また沈み、時移る　喜び哀しみを　乗せて流れゆく」(『屋根の上のヴァイオリン』より)。

数か月前から、折に触れて、畑仕事をしている。余暇の遊みである以上、偉そうなことは何一つ言えないのだが、土に触れることによって、首から上ではなく、首から下のところで、まことにささやかなりとも、「われは生きている」と実感している昨今である。

▼52号／「長靴をはいた牧師」

〈2020.11〉

フランスの作家・ペローの童話『長靴をはいた猫』は、猫知恵?を働かせて、貧しい粉挽き職人の三男坊の主人を貴族にと仕上げ、ついには王様の娘婿に出世させる物語ではあるが、益田の長靴をはいた牧師は、約50坪の借りた畑に野菜を植えて、その収穫物は到底食べきれないので、ご近所の方や、教会員にお裾分けしている。すると、あら不思議、回りまわってエビでタイを釣るようなこともないではない。すべては、神様のなさること、有難く受け取ることにしている。

約半年前にもなるのか、車で10分間のところに休耕地があって、そこは周り一面雑草に覆われていたが、その草叢の隙間を覗いてみると、ミミズが這いまわり、また惚れ惚れしそうな肥沃な土壌であった。早速、交渉してお借りする。最初にやったことは、まず耕耘機でしっかり土を耕すこと。それから畝を作って、長谷川方式の認知症テストには簡単にパスするほどの野菜の種と苗を植えた。あとは、育つのを待つばかり。草刈、水やり、間引きなど、細かい手作業はすべて俯いての肉体労働。真夏の作業ともなれば、これはもう熱中症寸前。腰折り損!のくたびれ儲け。そうなると内心、「これじゃ、店で買った方が、なんぼか楽だ」と愚痴りたくなる。だが、そこは牧師である。

「しかし、成長させてくださるのは神です」と、聖書に記されている教えを肝に銘じるべし。かくて、今日も長靴をはいた牧師は、せっせと野良仕事に出向くこととなる。皆さん、野菜を食べましょう。

(編集部註／この「益田っこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏（神戸市出身）が月間で発信しているハガキ通信を転載したものです〉

◆扉の平面図

高谷和幸

壁に対して穿たれた通路として扉は最初からあったものではない。三次元的に空間視する思考がわれわれに芽生えてから、内と外を光のように通過する扉の能力を得た。襖絵のように襖が閉じられて眼前化できるものと、扉は同等の表面上の性質をあわせ持つが、それと違って扉は見る者の鼻先で立ちはだかる。それは扉が外界と内界とのただの隔膜ではないからで、それが扉の前に立つのは希望であることを許さない。扉の向こう側は空でも地でもない。いかなるクロノロジー的な場面を取り出して普遍化してそこに見せることも出来ない。また心理学や人類学が扉の向こうの言語活動とは独立した人間的事実として構築するかもしれないような心理的な時代か身体の歴史のようなものでもない。扉を開ければ、魔法のように空を飛んだことがある、確かにそれは遺伝子が経験したことなのだろうか。夢のような世界を、扉は手順という縛りから意識が逃れることがないように存在する。奇跡的な時間が扉を開ける。それは扉のノブに触れたときに、一瞬に指先を走る、空と地を駆ける閃光のような、それは歴史的でもない極めて没個人的な痛みとして、平面図に記される。

◆心なき　詠

岩脇リーベル豊美

心なき愛　頭なき兒　思想犯の冬
砂丘にて　凸凹なる精霊襲来
光りの窓辺　屍遺して窓歌鳥
生物兵器ボタンに　指置く朝夢
小春に翳る　昔日の悲恋よ
犀の背中に憩う小鳥　小春坂
大陸弾道射程で　柊の廃墟
時間支配　くさめの自由の蹂躙
聖域に踏み入る　半分の真実
いのち絶つ　形容矛盾の仕組み
余生の友　たきちゃんとはるみちゃん
西ドイツ首都を知らぬ　極左学生
旧都幻視　ブラウン運動の右脳
起源　何世代か先の大樹植える

◆モモンガ

黒田ナオ

午後六時十五分
ビル七階にある会社の
ロッカールームの片隅で
重たい窓をこじ開ける

さあ、夕焼けは終わった
ぐいっと体を乗り出すと
モモンガが
暗い空に飛び出した

コンクリートの壁を蹴り
ビルからビルへ
翔びわたる

冷たい風が
耳の奥まで吹き込んで

闇へ闇へと落ちていく

電卓を叩いた指先から
並んだ数字がこぼれ落ちる

首筋あたりにこびりついた
四角い言葉が逃げていく

闇が私を捕まえる
モモンガの私を抱きとめる

コートの裾をひるがえして
あっちのビル
こっちのビル

もう少し
もう少しだけ

私の私に戻りながら

ひょーいひょーいと
翔んでいく

◆スズカケの樹の下で

にしもとめぐみ

二人が出逢ったのは
スズカケの樹の下
何百年も生きてきた樹木の
木肌は地図めいた迷彩模様

スズカケの樹の下で
あなたは私を狂はかす
私があなたを狂はかしたのか
木漏れ陽がそよぐ

幹を流れる
内部の水音は命の音
あなたを抱きしめるように
樹を抱く

静かに佇む樹に
私は寄り添う
いつまでも側に
と　祈る

大きな樹木が
立ち並ぶ
その広がりの中で
風の音を聴いている

アルチュール・ランボォを読んで

にしもとめぐみ

ランボォを知ったのは国語便覧という学校からもらう資料でした。洋風の素敵な魅かれる面影、でもその詩は難しくて読んだのは随分後のことで「酔いどれ船」でした。長くて読んでも理解不能でした。されどランボォ、ずっと気になる詩人でした。「今回何か語れ！」との指示でランボォを取り上げてみました。大学でフランス語を学んでいたので原文、音で読めたのは嬉しかったです。ランボォの詩は修辞学をきちんと修めた上での詩群です。「若き青春の一時期の詩の言葉」と言うのではなかったのだろう。文学をやめてしまったランボォが何故今も詩人の前にあるのだろう。小林秀雄は、ランボォを訳して「撫でてさすって確かめればよい」「誰かに読んでもらいたいと思いその詩集を翻訳したのではない、まったく自分のためにやったのだ」と述べる。また翻訳された詩は、既にランボォの詩ではない「日本の詩」だと言った。中原中也がフランス語を学びランボォを訳している。中也の詩が好きな私は、ランボォを読まなければならない、ヴェルレーヌを読まなければ……。良く知られる詩は口にふと出てきてしまう詩句であるはずなのだけれど、ランボォの詩句で言葉に出てくるものはあまりない。しいて言えば

L'ÉTERNITÉ　　永遠
中原中也訳

Elle est retrouvée,	また見付かつた。
Quoi? — L'Éternité.	何がだ？　永遠。
C'est la mer allée	去(い)つてしまつた海のことさあ
Avec le soleil.	太陽もろとも去(い)つてしまつた。

Âme sentinelle,	見張番の魂よ、
Murmurons l'aveu	白状しようぜ
De la nuit si nulle	空無な夜(よ)に就き
Et du jour en feu.	燃ゆる日に就き。

Des humains suffrages,	人間共の配慮から、
Des communs élans	世間共通(ならし)の逆上(のぼせ)から、
Là tu te dégages	おまへはさつさと手を切つて
Et voles selon.	飛んでゆくべし……

Puisque de vous seules,	もとより希望があるものか、
Braises de satin,	願ひの条(すぢ)があるものか
Le Devoir s'exhale	黙つて黙つて勘忍して……苦痛なんざあ覚悟の前。
Sans qu'on dise: enfin.	繻子の肌した深紅の燠よ、

Là pas d'espérance,	それそのおまへと燃えてゐれあ
Nul　orietur.	義務(つとめ)はすむといふものだ
Science avec patience,	やれやれといふ暇もなく。
Le supplice est sûr.	願ひの条(すぢ)があるものか

Elle est retrouvée,	また見付かつた。
Quoi? — L'Éternité.	何がだ？　永遠。
C'est la mer allée	去(い)つてしまつた海のことさあ
Avec le soleil.	太陽もろとも去(い)つてしまつた。

「見者」は幻視者ではない。詩人が見たのは、幻ではない。文字通りその「眼」をもって「まざまざと見た」としか小林は思えなかった。ランボォにとって、詩とは、見てきたものを現実化する手段にほかならない。ランボォの宿命は詩作ではない。「見ること」だった。狂って遂には、自分のみるものを理解することが出来なくなろうとも、彼はまさしく見たものは見たのだ」というランボォの言葉を小林は引いている。

「他界ではなく、他界に破壊されたままの下界」であり、「未知の国ではなくて、彼岸の恐るべき隣人によってばらばらに把握された、最も手知かなわれらの周囲」だとリヴィエールはいう。「他界」は死者の国、それは「下界」を包み込む。「他界」は現実世界と同心円状に、多層的に存在し常に今とつながりを持ちながら、不可分に「現存」する。

しかしどう語ってみても「他界」は、謎に違いない。誰もがそういうだろう。謎は、解かれることを待ち望んでいるのではない。解かれ得ぬままでありながら、共に生きる人間を待ち望んでいる。神秘主義者はこの現実世界よりも異界を語ることに忙しいが、神秘家の責務は眼前の世界に深く生きることにある。むしろ「下界」すらも、永遠の「謎」であるといわざるを得ない経験が、その生涯を貫く人物を神秘家という。

真実の詩人は同時に優れた神秘家である。（若松英輔著『叡智の詩学　小林秀雄と井筒俊彦　哲学者は詩人たり得るか』慶應義塾大学出版会、2015）

★編集部註／この文章は、第 156 回「Melange」例会（2020.10.25 開催）の第一部読書会で、にしもとめぐみさんが、アルチュール・ランボーについて語った内容をもとに、そのエッセンスを本誌に寄稿したものです。

◆セエルスマンの孤独

前田雅正

カタンカタンカタン
コトンコトンコトン
カタンカタンカタン
コトンコトンコトン
単調な鉄路のリズムに揺られて
窓の外を眺めていた

踏切の警報機は
カアンカアンカンカン
コンコンコオンコオン
過ぎる前と後では音階を変え
喧しく鳴っていた

ブウンブウンと黄色い灯が飛んでいった
季節外れのホタルの灯が飛んでいった
夜汽車の窓の外を飛んでいった

ぼくは半分だけ覚醒して
やっぱりぼおんやり眺めていた

四分の三ほど目覚めた頃
それがホタルの灯でないことに気が付いた
ホタルの灯ではなく人家の灯だった

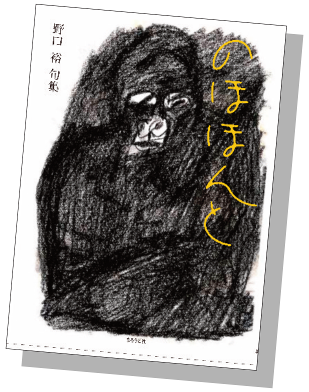
あの灯の一つひとつに家庭があるんだ
お父さんがいてお母さんがいて
きっと子供達もいるんだ
貧しい夕餉のお膳を
みんなで囲んでいるんだ
暖かい家の懐かしい場所なんだ

車掌の声がもそもそと響き
停車の案内があった

次に夜汽車が停まったら
またぼくは一人きりで
見知らぬ駅の停車場に降りるんだろう
晩秋の信州で

図書出版 まろうど社

野口 裕著
句集『のほほんと』
978-4-89612-039-4
定価(本体二二〇〇円)
B6並製　本文一七六頁



自在な句風に宿る修辞と機智

★第一句集とは思えないほどの完成度の高さが多くの俳人たちを魅了する。
★「野口氏の句には、飾らない柔らかさと関西風のアイロニーがある。だが底には理学で鍛えた正確な論理が通っている。さらに俳句の伝統的修辞法も自在である」(北村虻曳氏)
★〈ずつないわ冷や素麺食いすぎた〉〈さえずりのひとつとなりぬ人の声〉〈重機また人の末路黄砂降る〉〈街とても風は季を呼ぶ花水木〉

中嶋康雄著
詩集『プランクトン
しかいない家にも』
978-4-89612-040-0
定価(本体二二〇〇円)
四六並製　本文八二頁

いのちへ限りないオマージュ

★「プランクトンの棲む中嶋宇宙が指向するオブジェクトたちは人間の皮膚を纏い心を仮称して現れ、幾度も絶滅した世界を語りだす。」(高谷和幸氏)
★「虫は地球上で石炭紀から数億年生きている。人類が人工知能やらなにやかやとともに絶滅した後も、きっと生きているだろう。……そんな地球の大先輩にも、たくさん本詩集では登場してもらった。」(著者後書より)

まろうど社の近刊予告
前利 潔著　評論集『無国籍の奄美』　沖永良部島からの思想の礫!
亘 余世夫著『徳之島 亀津方言集』待望の刊行!

〒658-0016 神戸市東灘区本山中町 4—14—19
電話&FAX 078・412・2631
E-mail maroad_kobe@yahoo.co.jp

◆ロードス島の犬

高木敏克

僕も家内も人混みが好きでない。二人は人を避けて海岸に向かい、浜風の通り道を探していた。道は石積みの壁にはさまれたまま急な坂になっていた。壁の上には黄色い旗がたなびき、そこから垂れたロープが鉄のポールを不規則に鳴らしつづけていた。僕には風を追うことができない。不規則な風は常に規則の裏をかいている。海は一瞬にして現れた。世界には一瞬の前と一瞬の後しかないみたいだ。

一本しかない街灯の向こう側で数人の青年がビーチバレーを楽しんでいた。

二人が立ち止まると背後でも立ち止まる音がした。石畳の上で立ち止まる数匹の犬の爪の音だ。思わず逃げようかと思ったが、どの犬も尾を振りながら近づいてくる。一匹が足元に座りこむと前足をスフィンクスのようにそろえて何食わぬ顔で二人を眺めた。

「何か言ってみろ」と言いたげな表情だが、にらむと目をそらした。

「お前たち、一体何の肉を食ってそんなにでかくなったのだ」

「野良犬じゃないみたいね。きっと、このあたりの別荘で飼われている犬よ。飼い主がこの島を離れている間は放し飼いにされているのよ」と家内がいった。

「そうにちがいない。ほら、なつかしい人に再会したみたいに腹まで見せる。まるで教団の軍隊のような悲しい犬たちの集団だなあ。君たちは十字軍か」

すると、そいつは人を食った顔で振り向いてこういったのだ。

「私は、ベルジアン・シェパードドッグ・ブローアンタール・インテルメッツォです。そしてあなたの名は？」

「おれのあだ名は短いよ。アルパカだ」と言ってやると、犬はおかしそうに少し肩をすぼめた。そして言った。

「そうさ、おれたちはこの島の住民さ。今は家の人達が帰ってしまって、集団生活さ」

「へえー、それは、それは。楽しそうだね」

「そうでもないよ。このロードス島は観光しても退屈なところだろ。どこに行っても十字軍の城壁ばかりで、でも、おれたち犬にとっては天国の島かもしれないなあ」

「ほんとね、楽しそうね」

「おれたち、ビーチバレーだってできるんだぜ。あのボクサーが名犬だ」

「ああ、そうなの。名人という意味ね」

「それに、ペーターさんが毎日二回食事を運んでくる。さっきまで、それを平らげていたんだ。うまかった。これから、砂浜で遊ぶところだ」

そういうと、犬の教団チームはいっせいに走り出し、ドイツ語をしゃべる青年たちからビーチボールを奪おうとして遠くで飛び跳ねていた。

◆石の転がり方と拡散の日々

大西隆志

運ばれてくるたび
旅とは上手い喩え
絶え間なく引く閾
息もつかない速度
角のない石と意思
川を下り波に洗い
世紀に跨ぐ転がり
くるくる黒と白へ
変異する僕らの目
まぶたを閉ざすと
飛び散る川底の幕

四隅に集まった砂
微動で進みはじめ
光は強弱をつける
灯台の白い外壁に
石が浮かび上がる
海面を進む美術家
家屋は崩れていて
ガラスも散らばり
泳ぐに人と並走か
フィルムは回って
地面に傷跡を付け

祝祭の日々は短く
石は飛び出さない
高速の橋脚は捻れ
石はくるくる暮れ
まといつく植物も
バクテリアも落す
緩かに締めつけた
火山岩の軌跡には
かさねられた幻が
漆黒の夜の光束を
肉体の上へと拡散

◆裸足

中嶋康雄

ベランダの錆びたてすり
這い回る平べったい軟体動物
腐ったような真っ黒なサボテンを
ドロリとした目で育てている
ぶら下がって風に揺れている血塗れの
火はボヤ騒ぎでおさまった
酔って窓ガラスをたたき割った拳
かびが生えた布団が血痕にまみれる
交わりつつ白い角が
透明の粘液をふきだし
ほそい月をなめている
小さな裸足がいつまでも笑ったまま
冷蔵庫を開けて食べ物をさがしている
干からびかけた刻みネギのパック
牛乳パックの中身がかたまりかけている
足もとの綿埃が纏わり付く使い捨てられた
ティッシュペーパー
笑いながら突っ立っている
インスタントラーメンの冷めきった汁
ガラスの破片が指に刺さる
血が丸く盛り上がり崩れる時間に
コオロギが鳴く
昨日の土砂降りで湿った靴のどん底を
好む虫が良いはずがない
殺したい
全員を殺したい
今日の予定

◆雨の日

中嶋康雄

こんな雨の日に
卵が孵る
でてきたものは
うすっぺらで
なにもせず
うすっぺらのまま
ただぺらぺらしているだけで
なんでわざわざ
うまれてきたのか
またでてくる
ほおっておく
わざわざ買ってきたお菓子は湿っているし
わざわざつけたテレビはつまらない
なんの臭いかわからない臭いが漂う
冷蔵庫の音が
雨に混じり
凶暴になる
傘を部屋の中で乾かす
湿気が漂い
うまれてきたなにかが育つ
なにかがただの紙切れならば
捨ててしまえばいいけれど
そういうわけにもいかない
うすっぺらいものが
今もいる

◆絆創膏

野口　裕

カミソリが通りすぎるたび泡に混じる髭の粉
マウントを取り損ねた自尊心のようにへらへらとただよう
ああ俺にも欲があったんだな
どれ、モーニングコーヒーをたっぷりにしよう

◆ことばの積み木

野口裕

首をすくめたたんぽぽが時を待つ
が　　　　　　　　　い
飛びたつ雛に何を託して
ん　　　　　　い
でき上がりさて
も　　　も
動　つ
い
て　て
い　　　み
なくてななくせ
くわしいことを知る
て　　　　　　悲
ももとせの年月作った劇中劇
運転中の心臓が脈を伝える喜劇だ

アップルパイの、遠いまぼろし

安城 位久緒　Anjo Ikuo

アップルパイを焼くだけの、のどかな英語の授業があった。高校時代のことだ。アメリカ人の先生が暮らす木陰の宿舎を、同級生とはじめて訪れた。先生はまだ二十代後半だったか、暗めのアッシュ・ブロンドの髪を、女優ファラ・フォーセットの慎ましい末妹とでもいったボブカットにした、ほがらかな目にピンク色の頬の美人である。室内には、わが家の日本家屋を天井から白々照らしているような灯りがなく、窓からの光がやわらかい。英語のレシピは十数行と簡素で、絵も写真もない。まず小麦粉とバターを練ってパイの土台をつくり、型に伸ばし、縁を高くする。りんごに砂糖、シナモンとレモンで風味づけして並べた上に、バターと小麦粉、砂糖を混ぜた、そぼろ状のクランブルを敷きつめ、オーブンに入れる。文句なしに香ばしく甘酸っぱい、上出来のパイになった。アップルパイも先生も、ふだんは緑に隠れた古い宿舎も、当時でさえとっくに絶滅危惧種の、純朴で良心的なアメリカを想わせた。

この手のアップルパイは、アメリカンならぬ、ダッチ（オランダ風）アップルパイと呼ばれる。変わり種ではない。格子状のパイ皮で飾るパイ、一枚のパイ皮をかぶせて切れ目を入れたパイ、リンゴがむきだしのパイなどに混じって親しまれている。

なにしろアメリカは、移民の国である。さまざまなアップルパイも、欧州からやってきた。イギリスでは十四世紀からレシピが残り、十九世紀までには生活の一部になっている。ケイト・グリーナウェイのＡＢＣ絵本や、ナンセンス詩人、エドワード・リアの「アルファベットの詩」をみれば、Ａではじまる言葉を代表するのがアップルパイだ。二〇世紀初頭、イーディス・ネズビットの児童文学『レイルウェイ・チルドレン』（『若草の祈り』『鉄道きょうだい』の邦題がある）でも、子どもたちに大人気。冤罪になった父の帰りを待つ一家だが、引っ越し先の田舎で最初の朝食にパイがあったおかげで、心が満たされる。

それでもアップルパイは、アメリカの代名詞だ。多様な人と文化がたどりついた各地で愛され、中身のリンゴにも、「アメリカ的」な開拓者魂や未来志向が刻まれている。『森の生活　ウォールデン』で知られるソローは、新世界で野生化して実るリンゴを「人間の独立性や冒険心をなぞる」「もっとも気高い果物」と称えた。リンゴの種を辺境にまきながら旅した開拓者、ジョニー・アップルシードことジョン・チャップマンの伝説は、今も幼い子らが学ぶ。現代ではコンピュータのアップル社が、世界中に枝葉を広げる。

as American as apple pie、「アップルパイのように（典型的に）アメリカ的」という言い回しがある。手放しに愛国的な文脈で使われていたが、ジャーナリストや作家は、皮肉の利いた社会時評をしようと、「人種差別はアップルパイのようにアメリカ的」「内部告発はアップルパイのように……」「女性への暴力は……」など、シュールだがもっともらしい組み合わせを飽きずに生み出す。それ自体がアップルパイのようにアメリカ的な、手軽でいて、理想の共有を求めるゆえのフレーズである。

ケルアックの『路上にて（オン・ザ・ロード）』の語り手は、ヒッチハイクとバスの旅の一時期、アップルパイのアイスクリーム添えばかり食べている。栄養があり、もちろんうまいからだというが、それだけだろうか。目の前の世界への愛と、もっと向こうにこそ、すばらしい神秘が待っているという信念。そんな分裂を同時に生きるのがアメリカであり、それを一口で味わえるのが、アップルパイなのかもしれない。

レイモンド・カーヴァーの詩、「娘とアップルパイ」も、屈託のない安心だけの味ではない。父の前に、焼きたてのパイが出てくる。砂糖とシナモンで焼き色がつき、皮の切れ目から湯気があがる。しかし、パイを焼いた娘は、サングラスをかけている。冬の朝一〇時のキッチンで。父は娘の人生を、どんな男を選んだにせよ、熱々の一切れを頬張りながら見守るしかない。

アップルパイと人生は、何層もの現実でできている。単純明快であることは、いつかどこかのまぼろしだから、いつまでも追い求められる。

◆白化するすべて

大橋愛由等

次の門が
茫洋と
霧中にあると
教唆したのは
伐られた
ばかりの
樹木から
かすかに
流出する
混濁
と口伝されている
のだとすれば
以前在った
と恣意していた
門前に
蠱惑な
無慈悲な
硬水が

湧き出ていて
「呑め」と
書かれ
雲が溶け
木の根が
笑い出し
レンガ壁が
Ａと非Ａを
自壊させ
夜明けという結界を
抹消した
ゆらめきを
石人に
ゆらゆら
メモランダムに
あ行ばかりで
書き伝えようと
銀傘をさし
すべてが白化して
凪たちが
ひらかなを
剥奪される
夜明け前の
その刻に
水溶性の

詩人は
コンゲンを
もういちど
見ることを
気づかれないように
そっとそっと
くつがえるものと
くつがえらないもの
が同衾する
枯れた
下り坂だけの
迷路街区を
歩きに歩き
行き着いた
波止場では
海が生え
群魚の
わななきが
白化を怖れて
始まるのだと
知っていながら
石人の尾骨の
苦味を
記憶しないでおこうと
佇っているのだった

◆川向うに

木澤 豊

川向うに　煙突が立っていて
朝早く　ふたりか川が入っていく

どこで見たか
せせらぎ

町のおとが途絶えると　ことば
ゆらゆら

単数　複数というお化けの気配が
町の切り通しの石垣に
空襲の　黒い煤あとに

七五年の　目

むこうから呼んでいるから
服ととのえて　でかけないと
なぜか　わからないが大事なこと

のようだ

遠く　白い馬が走ってきて
風になった

おれ
いっぽんの　棒みたい

白馬が木の柵に囲まれている
どうして　だ

棚にもたれると土と風の匂いがして
触るとチクチクして

で　さ

◆逢う坂

木澤 豊

こんな峠があった
ふっ

川向うで三本の煙突が
一本になった

路地の奥に火が立ち
ふたりが川に入っていく

葉っぱが斜めに舗道に落ちて
とめどない　とめどない

柱が倒れる
とちゅうで待ってるって言ったけど

どぶ溝のふち　ゆくと
なかに青い花が開いて

ふらふら歩きの男のあとをつけて
はっ

おれじゃないか
久しぶりだな

倉庫の　どでかい木扉に
消えたやつ

救急車のサイレンがきこえる
帰って　手紙を書き終わらないと

だれが　待っている
靴の先の石が
痛い

◆梨を割る

木澤 豊

暗い台所で
壺のかたちの梨を

ナイフで割って　口に運ぶと　指から　とめどなく滴がおちる
窓の向こうで　雪がぐるぐる渦巻いて　風音が人の声にかわり
もう　しゅうしゅう　呼んでいる

北上川の岸の　大きなクルミの木の下の長い木のベンチの左端に
梨を送ってくれた昭七さんが座っているのが　とおくに見える
空は天頂へいくほど青が深くなり　その人が　小さく白く光っている

ふたたび　器のかたちを割ると甘い透明な雫が　内側に　りん　と反響し
風というと　風立ち　じゃあねというと　枯れ葉に
ざあと　水滴が鳴って空に割れ目が　走る

次の実を左手でおさえ　右手の刃物を下ろす
茸を取りに行こうよ　と言った人が　器の割れ目から流れるように　出かけてしまった

びゅうびゅう聞こえる音が　聞き分けられないで
そのあたりへ　声の石を投げる
水滴が　こんなに壊れた器に反響して　棒になって聞いている

また　ひとつ　割ると
待っている水滴

神戸詞（うた）あしび

145-2020.11.29 大橋愛由等

学生時代、京都は左京区に下宿していたので、東山界隈は馴染み深いのだが、西山あたりは縁が薄かった。それが近年、明恵が依拠した栂尾の高山寺を訪れたりして、西山にも多くの古刹が点在していることを自覚するようになった。

今月（11月）に訪れたのは、三鈷寺（さんこじ）という浄土宗西山派の寺である。証空（1177-1247）について「カフェ・エクリ」で語る機会があったので、事前に訪れてみようと思い立ち訪れたのである。

阪急京都線の東向日駅からバスに乗ること20分。終点の善峯寺で下車。紅葉の名所であるこの寺の境内を通って目的の三鈷寺に向かった。善峯寺は寺堂もそこそこ残っている寺で、ここの宗旨が天台宗というのが、証空のありようを問う鍵のひとつとなる。

証空は、師である法然がからんだ「建永の法難」（1206）、「嘉禄の法難」（1227）にも難を逃れている。これは証空が天台宗の座主となる慈円と良好な関係であったことが、その被害者にならなかったという説がある。証空と慈円の個人的な友誼関係もさることながら、証空は天台学に通暁しており、華厳思想からの影響もみられるところから、当時の仏教思想の本流である「聖教」分野を収めていたことも大きな要因であったろう。つまり法然が念仏行をもっぱらとする一向専修を確立するために、既成仏教勢力と対峙していく新興宗教運動家という側面を前面に打ち出さざるを得なかったことに対して、証空は、生来の学究肌を貫いて、浄土信仰を日本の仏教のなかで、思想として打ち立てるべく沈思を重ね著述に生涯をささげたと言っていいだろう。

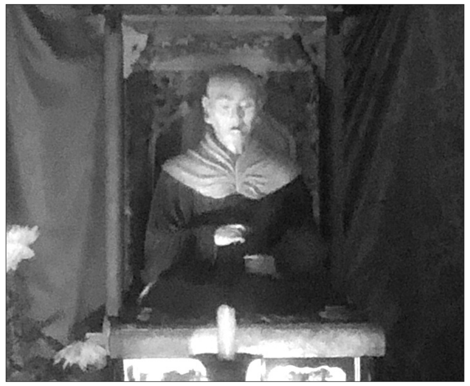
証空の浄土思想の中で取り上げたいのが、〈機法一体〉という概念である。〈機〉とは「ひと」という意味で、浄土思想によって一般のひとびと（衆生）にも語義を広めて使うようになったと思われる。〈法〉とは、法身仏としての阿弥陀如来を意味する。その〈機〉と〈法〉とが〈即＝一体〉という大乗仏教特有の思考装置によって、本来不二ものであるというのだ。華厳思想の中には、「初めて発心する時、便ち（すなわち）正覚を成ず（じょう）」とあるが、この「正覚を成ず（じょう）＝仏の悟りを完成」するのはあくまで菩薩であり、一般のひとびと（衆生）ではないのである。

法然から証空にかけての浄土思想では、ひとびと（衆生）と仏（法身仏としての阿弥陀如来）とが一体＝本来不二のものであり、それを実体化するのが口称（くしょう）念仏だとするのである。この転移（易行化）によって、いままで寺院内の思弁的な信仰だった仏教が一気にごく普通に生きるひとたちに受け入れられる素地を用意したのである。

証空の思想は、西山義といって、現在、浄土宗西山派の三派によって継承されているが、浄土宗といえば鎮西派が主流であり、この三派の寺勢はさかんではない。むしろ証空が打ち立てた〈機法一体〉の思想をもっとも先鋭化したのは、証空の孫弟子にあたる一遍(1239-1289)であろう。

一遍は云う。「名号の外に能帰の衆生もなく、所帰の法もなく、能覚の人もなきなり。是即（これすなわち）、自力他力を絶し、機法を絶する所を、南無阿弥陀仏といへり」。〈機〉と〈法〉が一体化したあと、自力・他力の差異もなくなり、すべては南無阿弥陀仏という名号（名辞）に帰一するという、まさに証空理論の極北なのではないだろうか。

証空の浄土思想が一遍を生み出した



京都・三鈷寺にある証空の木像。
この寺から京都市街地が一望できる。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.157
神戸

2020年11月29日　通巻157号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)